

発掘調査報告書第36集

市立東伊那保育園建設工事緊急発掘調査

善 込 遺 跡

1995.3

駒ヶ根市教育委員会

例 言

1. この報告書は、市立東伊那保育園建設に伴う事前の発掘調査であります。
2. 図の層位、縮尺などは各図に示してある。
3. 土器の実測・製図・遺構の製図は気賀澤進があたった。
4. 写真撮影は北澤武志が、本報告書の執筆・編集は気賀澤があたった。
5. 遺物等発掘調査関係資料は、駒ヶ根市立博物館に保管してある。

目 次

第Ⅰ章 遺跡の概観と調査の経緯	2
第1節 遺跡の立地及び歴史的環境	2
第2節 発掘調査の経過	4
1 発掘調査の経緯	4
2 調査の組織	4
第Ⅱ章 発掘調査	5
第1節 調査概要	5
第2節 遺構と遺物	5
第Ⅲ章 おわりに	8

第 I 章 遺跡の概観と調査の経緯

第 1 節 遺跡の立地及び歴史的環境 (第 1・2 図)

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那栗林にあり、一帯は善込と呼ばれている。JR飯田線大田切駅より北東へ約 4 km に位置し、標高は、640～645 m である。高鳥谷山より流れ出る塩田川の左岸にあたり、東側は天王川によって開析され細長い残丘地形をなしている。

今回の発掘調査地点は、善込遺跡の南西端にあたり、地番は東伊那5671番地である。道を隔てた東側には、市立東伊那小学校がある。遺跡は今回の調査地より丘にそって、北東に広がるものと考えられ、300×100 m の広範囲にわたるものと考えられている。

東伊那地区は当市内でも有数な遺跡密集地帯で、とりわけ弥生時代から中世にかけての遺跡は数多く注目される所である。東に位置する伊那山地から流出する小河川によって開析された台地と適当な湿地帯が数多く形成されていることによるものと思われる。

本遺跡と同時代の弥生時代の遺跡に限って周辺の遺跡について若干ふれておくこととする。当遺跡の北東には、栗林神社東遺跡があり、昭和57年の調査では弥生時代後期の竪穴住居地10軒と土壌 2 基、柱穴群が確認されている。調査以前に採土がされており、大規模な集落があったものと考えられる。

当遺跡東側の湿地帯を挟んだ対岸には城村城 (一 2) がある。戦国時代の城郭址であるが、採土跡の断面より弥生時代後期の住居址が確認されている。広大な台地は畑となっており破壊はほとんど行われていない。

当遺跡の南西段丘下は、天竜川の第 2 段丘面に当約 6 ha に及ぶ反目・遊光遺跡 (一 3) がある。縄文時代中期から中世にかけての複合の大遺跡で、昭和63年に行われた発掘調査では、縄文時代59軒、弥生時代18軒、古墳時代 5 軒、奈良・平安時代57軒、室町期の陸屋根式住居 1 軒が確認されている。

さらにこの西方一段低い段丘上には反目南遺跡 (一 6) があり、一部の区域の調査ではあったが、弥生時代後期の住居址 2 軒と方形周溝墓 3 基、壺棺墓 1 基が検出されている。

東伊那地区の南端新宮川端にはきつねくぼ遺跡 (一 5) ・殿村遺跡 (一 6) がある。この両遺跡は古くから知られる東伊那遺跡群の一角である。きつねくぼ遺跡は、市立東中学校建設の折に弥生時代の住居址が20基ほど検出されたというが正式な記録は残っていない。天竜川第 1 段丘上に位置する殿村遺跡は、一部の発掘調査によって縄文時代から平安時代にかけての大複合遺跡であることが確認されている。弥生時代では後期の住居址 3 基と方形周溝墓 1 基が検出されている。



第 1 図 遺跡の位置及び周辺の遺跡図 (S = 1 : 50,000)



第2図 善込遺跡地形図及び発掘調査概要図 (S=1:2,000)

第2節 発掘調査の経過

1 発掘調査の経過（第2図 写真1）

当善込遺跡の東にある市立東伊那保育園が平成8年度に改築されることとなった。予定地は善込遺跡の南限にあるため、試掘調査を行いその結果にてその後の対応を再度協議することにした。

11月25日から試掘調査を行った結果、一箇所より堅穴らしき落ち込みを確認したのみで、他からは遺物も全く検出されなかった。検討の結果、遺構は全域に及ばず一部のみであることから本発掘調査に切り換えて行うこととし、弥生時代後期の住居址一軒を検出して12月1日に現場作業を終了した。

調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が市の委託を受けて25万円の予算にて実施した。

2 調査の組織

調査会及び調査団の組織は次の通りである。

・駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

顧問	吉江修深	（駒ヶ根市教育委員長）
会長	高坂保	（駒ヶ根市教育長）
理事	友野良一	（駒ヶ根市文化財審議会会長）
“	松村義也	（駒ヶ根市文化財審議会副会長）（平成7年1月29日まで）
“	竹村進	（駒ヶ根市文化財審議会委員）
“	林 起	（ “ ” ）
“	新井徳博	（ “ ” ）
“	木下英明	（駒ヶ根市教育次長兼生涯学習課長）
“	気賀澤 進	（駒ヶ根市立博物館長）
監事	下平基雄	（駒ヶ根市収入役）
“	宮 臨 昌 三	（駒ヶ根郷土研究会会長）
幹事	市村重実	（生涯学習課課長補佐）
“	中村敏郎	（生涯学習課）
“	唐沢裕二	（ “ ” ）
“	北澤武志	（駒ヶ根市立博物館）
“	白沢由美	（ “ ” ）

・善込遺跡発掘調査団

発掘担当者	気賀澤 進	（日本考古学協会会員）
調査主任	北澤武志	（長野県考古学会会員）
調査員	木下平八郎	（長野県考古学会会員）
“	小町谷 元	（上伊那考古学会会員）
発掘調査参加者		

赤羽 慶三郎 渋谷 鉄雄
羽生 正吉 林 吉十



写真1 発掘調査風景

第Ⅱ章 発掘調査

第1節 調査概要 (第2図 写真1)

今回の調査区域は、善達遺跡の南限にあたり表面採集によっても遺物は全く発見されなかった。また東側に隣接する市立東伊那小学校の改築の折にも遺構は確認されていない。

試掘調査は2×2mのグリットを設定して行った。調査区の西側にて浅い柱穴状遺構らしきものが確認されたため、拡張して20mの長さのトレンチを設定した。柱穴らしきものは浅い舟底形を呈したもので桑の木の根の高乱土など混入しており植栽痕の可能性が強い。東側より竪穴住居址らしき落ち込みを確認したため、周辺にやや敷を増やしてグリットを設定したが、これ以外に遺構は確認できなかった。また遺物もグリット及びトレンチ内からは全く検出されていない。

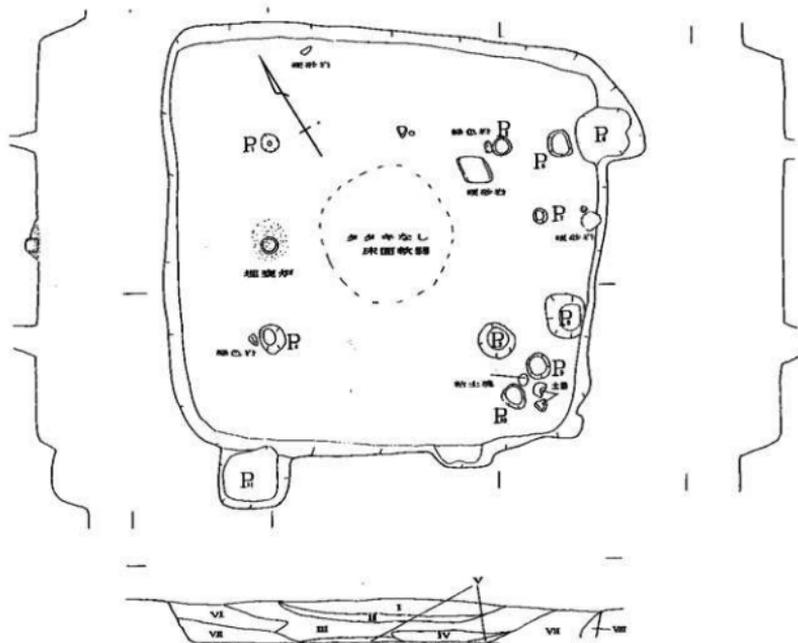
現況は畑で、耕作土(表土)は20~25cmと浅く漸移層、ソフトローム層へと続いている。

第2節 遺構と遺物 (第3・4図 写真2)

調査区域北東のグリットに落ち込みが確認されたため、拡張して調査を行ったものである。ソフトローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。覆土の堆積状況は第3図に示すとおりである。全体に炭化物粒が含まれている。

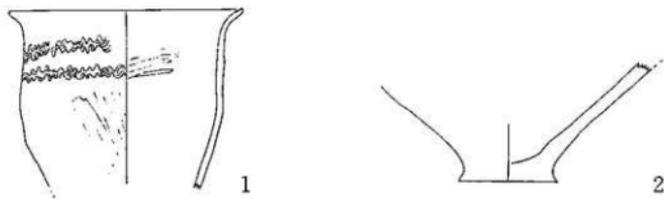
プランは隅丸方形に近いが南東部がやや内側に入り込んでおり、大きさは5.0(4.5)×5.0(4.7m)を測る。掘り込みは南東部が40cm、他は50cm前後である。床面中央部に1.5mの円形のタキのない所が認められたが他は堅くタキしめられている。

主柱穴はP1~P4の四本と考えられる。P1とP4の中間に胴下部を欠く壘(第4図-1)を埋設した炉がある。周囲をすり鉢状に掘り凹め壘を埋設している。硬砂岩や緑色岩類の原石や割石が床面から出土している。P2の中央側には平らな硬砂岩が据えられた状態で出土しており台石とも考えられる。住居址南東隅P9・P10の中間から



- I 暗黒褐色土 (暗褐色土混入) II 黒褐色土 III 暗黒褐色土 (暗褐色土混入Iより多い)
 IV 黒褐色土 (暗褐色土混入) V 暗黒茶褐色土 (ローム粒・IV層含む) VI 暗褐色土 (ローム粒混入)
 VII 茶褐色土 (ローム粒混入) VIII 茶褐色土 (ローム混入多し)

第3図 善達遺跡第1号住居址実測図 (S = $\frac{1}{60}$)



第4図 善達遺跡第1号住居址出土土器 (S = $\frac{1}{4}$)

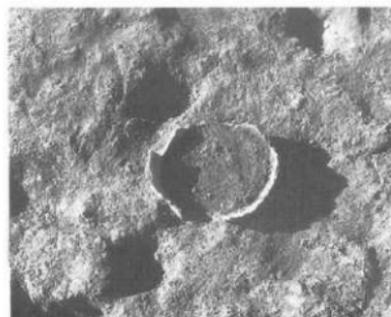


写真2 善込遺跡第1号住居址（中段は埋壺炉）

壺形土器の底部（第4図-2）と径7cmほどの粘土塊が検出された。

遺物は少ない。図示したもの以外では壺形土器の破片と先にふれた原石類のみである。

1は埋甕炉に使われたもので胴下部を欠いている。口縁部も一部しかない。短い口縁は強く外反している。頸下部には2条の波状の櫛歯文が施文されている。胎土には長石を含み赤褐色ないし白黄褐色を呈し良好な焼成である。内外面には斜方向のヘラミガキがみられる。

2は壺形土器の底部で、胴部は強く張り出している。胎土は緻密で白黄褐色に固く焼かれている。外面には斜方向のハケ調整が施される。弥生時代後期中島期と考えられる。

第三章 おわりに

今回の調査では、弥生時代後期の住居址1軒が確認されたのみである。市立東伊那小学校改築の折に遺構が検出されなかったことから善達遺跡の南限を今回の調査区域と予想していたことが、実証されたものと考えたい。

寒い中を作業に協力いただいた皆さまがたに厚くお礼を申し上げます。

善 込 遺 跡

平成7年3月31日 発行

編 集 駒ヶ根市上穂栄町23番1号市立博物館内
善込遺跡発掘調査団
発 行 駒ヶ根市赤穂町20番1号
駒ヶ根市教育委員会
印 刷 駒ヶ根市赤穂 4295
 (株) 宮 沢 印 刷

